

食育から見る挑戦的意欲



社会福祉法人 湘北福祉会 あゆのこ保育園
福田奈美恵

1. あゆのこ保育園の概要

神奈川県厚木市にある私立の認可保育所として、平成17年4月に開園した。定員は120名で、現在140名が在園している。0歳児～5歳児まで1クラスずつあり、今回の事例対象クラスは5歳児の24名である。様々な地区から入所してきており、卒園後は毎年10校前後の小学校に分かれて就学する。

保育理念は「児童の最善の利益の保障」「保護者に信頼される温かな支援」「地域の子育て支援の



充実」「理論と実践の相互啓発による先進的保育」の4つである。その中でも「児童の最善の利益の保障」が、当園の保育のベースとして大切にされている。保育所保育指針を基に、一人一人の子どもの人権を尊重し、いかなる差別もなく愛され、あるがままの自分であることを認められ、幸せに過ごせるよう配慮している。そのことにより、子ども達が自分自身を自由に表現し、一日を振り返って「楽しかった」と思えることを目指している。

また、戸外活動を中心とした感動と手ごたえのある保育を大切にしている。季節の変化や虫、植物、天候などに関心を持ち、自然環境の変化への関心を育み、豊かな感性が育つよう保育に取り組んでいる。感動したこと、不思議に感じたこと、創造したことなどを保育士や友達に伝えたり、自分で試行錯誤する中で挑戦したりしながら、様々な表現して楽しめる子どもを目指している。

園をとりまく環境として、当園は厚木市の中でも人口の一番多い地区に属している。園の東側は駅に比較的近く、大きな国道（246号線）が園から見える所を通っている。様々な店や車、電車など、市街地としての印象が強い。

子ども達は、小さな頃から電車や車を見に行ったり、少し大きくなると駅近くの公園で遊んだりする。プラネタリウムもあり、5歳になると徒歩で駅前を歩いて鑑賞に出かけたりもする。

反面、園の西側は田畑や川などが広がっている。遠くには大山や富士山が望める。小さな頃から農道で草花や虫を探しながら遊んだり、コイやアヒル、カモを見に行ったりする。近くにある湘北短期大学とは連携しており、大学敷地内の裏山に出かける機会がある。裏山は散歩道が整備された森林になっており、



年間を通して様々な自然を感じる事ができる。また徒歩20分程の場所には、大きな丘全体が公園になった「ぼうさいの丘公園」がある。4歳児や5歳児は、散歩や遠足で季節の自然に十分に触れながら遊ぶことができる。

2. 活動事例「栽培活動から色々クッキングへ」

今回、挑戦的意欲を育てる事例として紹介するのは、栽培活動を糸口に、経験の積み重ねを活かすことで様々なクッキングに挑戦する活動へと発展した5歳児の事例である。

子ども達の挑戦的意欲を育てる保育材を考える際、大切な視点の一つとして「経験の積み重ね」があるのではないだろうか。

“収穫したものを食べてみる”という活動も、3歳児は収穫してホットプレートで焼いて食べる、4歳児は収穫し、ゼリーに入れるなど簡単な調理をして食べる、5歳児は想いを持って料理をする……と、積み重ねた経験によって挑戦する内容も変わってくる。また、「まえに、かりん組（年長）さんが〇〇をご馳走してくれたから、今度は自分達が下のクラスにご馳走したい」など、昨年度の年長児に成長した自分達の姿を重ねあわせることで膨らむ想いもある。それぞれの活動のねらいとともに、育ちの先を見据えた“保育材としての経験”の在り方の検討も必要となる。

毎年行っているミニトマトの栽培活動は、経験したことが更に次の“想い”につながり、その想いを実現させたいという保育士の想いと共鳴することで、次々に生み出される子ども主導の活動へとつながっていった。

1) ミニトマト、できるかな？

当園の「育てたい子どもの姿」に「食への正しい理解ができ、食事を楽しむことのできる子ども」がある。その中の“野菜を育てる事で食への興味関心を深める”というねらいから、5月末に4歳児・5歳児クラスの子ども達が、ミニトマトを「1人1鉢」育てている。近隣の福祉農園の利用者さんとの交流も兼ねて、スタッフの方に植え付けを教えて頂いている。

植え付けたミニトマトは、子どもそれぞれが水やりをするなど責任を持って管理する。「花が咲いた！」「小さいトマトができていますよ！」「赤くなったかなー」「小さい子に、



採られちゃった…」など子ども達はトマトを育てながら様々な事に出会い、気づき、感じながら収穫を楽しみに待つ。収穫は、6月頃から始まる。順次収穫されたトマトは例年「その場で洗って切って味わう」か「給食室に行き“冷凍トマトにして”と自分で注文を出す」かの2通りあり、自分で選ぶことができる。

“冷凍トマトのはちみつがけ”は子ども達のお気に入り、毎年給食やおやつの時間に味わう子どもが多い。

2) 全員で、トマトを食べたいね

ミニトマトがたくさん収穫され始めた6月25日、かりん組（5歳児クラス）の子ども達からこんな声が聞こえてきた。

「食べきれない」「そもそも育てているけれど、本当はトマトが嫌い」

子ども達からは更にこんな意見が出た。

「かりん組全員で食べられるトマト料理を作って食べてみたい！」

担任は、元々料理が好きな事もあり、子ども達の思いを実現しようと決め、急遽クラスで話し合いを行った。「誰がトマトを食べられないのか？」を皆で調べ、クラスで7名の子ども達が食べられないと判明した。

次に、「では、その人たちも食べられるトマト料理は何か？」を話し合った。トマトジュース、トマトサラダ、トマトリゾット、トマトアイス…色々な案が出たが、「それは〇〇ちゃんが食べられないよ」など、7名全員がクリアできそうな料理を探すのは難しかった。しかし最終的に「これなら、全員で食べられる！」と“トマトスパゲッティ”と“ピザ”に決定した。

ここまでの流れを振り返ると「野菜を栽培し、自分達で食べられる料理を考えること」は、保育所保育指針解説書第3章「保育の内容」—1. 保育のねらい及び内容—（2）教育に関わるねらい及び内容—ウ 環境—（ア）ねらい—②「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」に照らし合わせることができる。また「挑戦的意欲を育てる」視点から見ると、先に述べた当園の大切にしている保育のベースが環境としてあり、そこに保育材として“ミニトマト栽培”があり、それが“トマトを使ったクッキング体験”という挑戦と意欲に繋がったと言う事ができる。

3) じゃあやってみよう！

①スパゲッティを作ってみよう

「どうやって作る？」「材料は何が必要？」「材料は家から？お店に買いに行く？」「作り方をお家で聞いてくる」「トマトには、バジルが必要」「ミートソースのパックに（トマトを）混ぜたら？」など子ども達は主体的に話し合いながらイメージを膨らませ、少しずつスパゲッティ作りは具体的になっていく。自分達が提案し、やることを決め、準備を進めることで、子ども達は「やってみよう！」と更に意欲的に活動に関わり、実現を楽しみにする姿が見られた。

話し合いの結果、「既製のミートソースにミニトマトを入れて煮込む」という“簡単ミートソーススパゲッティ”を作る事に決まった。子ども達の気持ちの盛り上がりを考え、タ

イミングを逃さないよう7月3日に買い物を実施した。子ども達は2班に分かれ、1班が買い物、2班は園に残り、トマトを切るなどの下準備を進めた。

買い物班の子ども達は、店の食品売り場に到着すると、「どこにあるかなー」「あ、あったー!」「こっちの方が安いよ」「いくつ買う?」など、それぞれの考えや意見を出し合った。それをリーダー的な子どもがまとめ、最終的に買うものが決まった。「お金を払うのは私」。その役割を楽しみにしていた子どもが、レジで支払いを済ませた。



下準備の班は、パスタを茹でたり、器を用意したり、ミニトマトを包丁で4分の1に切ったりする作業を保育室で進めた。中でも一人の男児は包丁の使い方が上手で、ミニトマトを黙々と切り続けていた。「〇〇ちゃん、切るの上手だね」「パティシエになれば?」など周囲の友達から誉められ、嬉しそうだった。このように自分の得意な事を活かし



て自然な形で役割分担が決められる事は、普段から互いの良さを認め合える環境と、自発性を活かした保育というベースがあるからこそ成り立つものである。

買い物班が戻ると、IHクッキングヒーターでミートソースを温めた。そこに切ったミニトマトを入れ、煮込む。保育室に良い香りが漂うと、子ども達の期待も高まる。茹でたパスタを器に盛り付け、出来上がった「トマト入り簡単ミートソース」をかけると、子ども達から「早く食べたい!」の声があがった。

家庭で子どもからミニトマトクッキングの話を聞いた保護者が、子どもに「バジル、持って行ったら?」と持たせてくれたので、それも刻んで自由に添えられるようにした。

このように、日頃から子ども達の想いに関心を寄せて一緒に考えてくださる家庭との繋

がりも、子どもの挑戦的な意欲を支える大切な要素である。

自分たちで挑戦して作った特別なスパゲッティ。トマトを苦手とする7名の子ども達も、全員が食べることができた。本人はもちろん、周囲の友達が「〇〇ちゃん、食べられたね!」「先生、〇〇ちゃん、トマトが食べられたよ!」と驚いたり喜んだりしていた。



②次は、あつあつトロリーピザを食べたい!

7月17日、今度はピザ作りを行った。子ども達はスパゲッティ作りを成功させた経験から自信がついた様子だった。前回、下準備をしていた班が、今度はピザの材料（ピザ生地用の粉、ソーセージ、チーズ）を買いに行った。ピザ生地用の粉が見つからず、子どもが店員さんに聞いてみたが結局無かった。店員さんのアドバイスで、急遽強力粉を購入した。



栄養士にピザ生地の作り方を聞きながら、「粉を袋に入れて少しずつ水を足し、練る」という事をやってみた。ある程度まとまったピザ生地は扱いやすく、粘土のようで子ども達も楽しかった様だ。ピザ生地にトマトソースを塗り、チーズを乗せてホットプレートへ。

前回のスパゲッティは「みんなで一緒に」食べる為に、料理が冷めてしまっていた。それを経験済みの子ども達からは、「あつあつピザが食べたい!」「チーズがのびるやつ、

やりたい！」という意見が出て、今回は“焼きあがったピザから食べよう”ということになった。これで全員が更においしく食べられ、子ども達は満足した様だった。



4) お家の人にも伝えたいな！（保護者向けの掲示を通して）

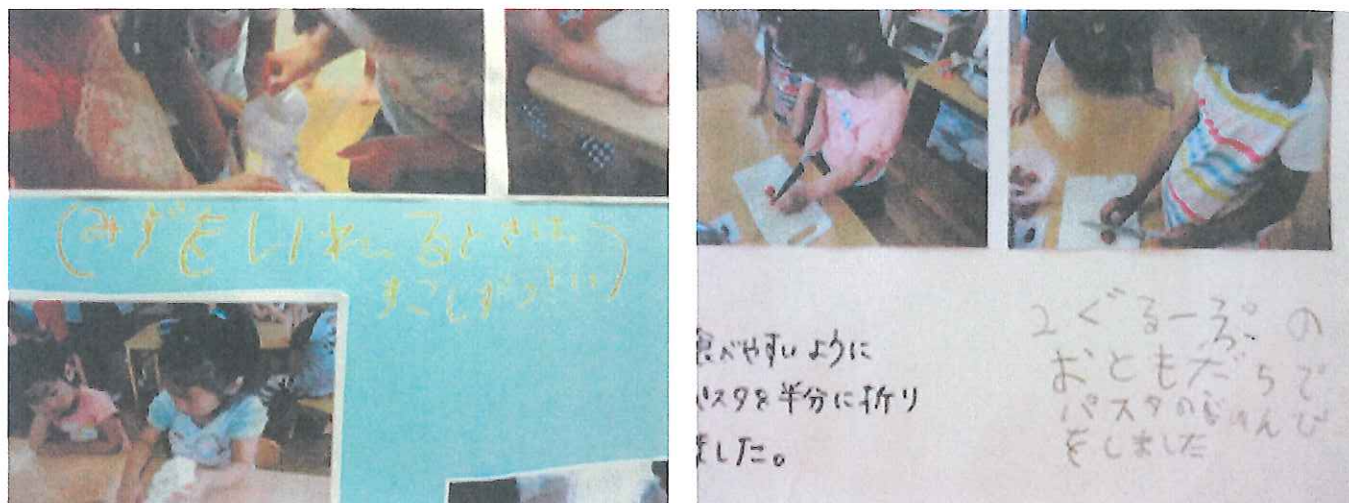
当園では、廊下に写真やメモを入れた掲示をよく作る。保護者に活動の目的や様子を分かりやすくお伝えし、保育への理解を深めて頂くねらいがある。

今回の一連のクッキングについて、担任が掲示のために写真を模造紙に貼り付けた。

子どもに「一緒に（掲示）作ってくれる？」と聞くと、数名が「やるやるー！」と掲示にコメントや絵を入れ始めた。



子ども達も日頃から廊下の掲示を目にしており、それが“お家の人に向けたもの”だということを理解している。「2グループのおともだちでパスタのじゅんぴをしました」「すばげっつい みんなたべたよ。おいしかったよ」など、活動の様子を説明するコメントや感想などが書かれた。また、中には「みずをいれるときはすこしずつ！！」と、ピザ生地作りの際の注意点を保護者に知らせるコメントもあった。子ども達の「楽しかった」「やりきった」嬉しさが掲示にも表れ、お迎えの親子の会話のきっかけにもなっていた。



このように、子ども達が保護者向けの掲示作成に関わることで、保護者の保育活動に対する興味・関心はより高くなり、クッキングに至る流れや活動の内容、子ども達の想いが伝わりやすくなる。それにより、保育の活動に保護者を巻き込みやすくなり、子ども達の主体的な活動を保護者が支える事にもつながっていく。また、掲示は活動を振り返る機会にもなる。活動が1枚の掲示で表される事で、“自分達で考えた!” “やってみたら、できた!” “みんなで頑張った!” と、自分達の姿が見える形になる。それが子ども一人一人の自信になり、次への意欲や更なる挑戦につながるのではないだろうか。

5) もっと、色々チャレンジ!

その後も、子ども達の「クッキング熱」は冷めることがなかった。

8月：ジャガイモを使った

「ポテトもち（給食のおやつ献立）」作り

「ジャガイモがあるけれど、どうしよう?」の担任の問いかけに「保育園のおやつで出る、ポテトもちを自分たちで作りたい!」

9月：月見団子作り

11月：サツマイモのパ

ンケーキ作り

芋掘り後、「サツマイモクリームを乗せたパンケーキが作りたい!」



12月：園庭で収穫したキウイを使ったおやつ作り

「ヨーグルトとかはちみつを混ぜるとおいしいって（家庭で聞いてきた）」

2月：恵方巻き作り・カレーライス作り

3月：クッキー作り「（卒園前に）年下のクラスにもご馳走したい」

など、何かが収穫できたり、行事等のきっかけがあったりすると、積極的にまた自然な形で様々な食に触れ、調理を楽しんでいた。

◇12月のキウイを使ったおやつ作りの様子◇



園庭のキウイ棚に、キウイがたくさん実った。収穫し、リンゴと一緒に袋に入れるなどして追熟させたが、あまり甘くならず酸っぱさが残った。「キウイをどのように調理するか」子ども達に家で考えてきてもらったところ「キウイジュース」「キウイジャム」「フルーツポンチ」「キウイクラッカー」などが挙がった。その中で、子どもが「ヨーグルトやはちみつを混ぜると、おいしいって」と家庭で聞いてきた意見を活かした料理も作った。



子ども達は、自分達が食べる以外に「先生や、年下のクラスにも分けてあげたい」という気持ちが自然に持てるようになっており、他クラスの保育士や年下の子どもを招いて、料理をふるまい、「おいしいねえ！」と皆で味わう姿が見られた。



◇2月のカレーライス作りの様子◇

担任はほとんど手を出さずに子ども達だけで調理を進めた。「皮はどうやって剥くのかな…」と困った場面でも友達同士で「あ、こうやると剥けたよ！」などと助け合う姿が見られた。今までの調理体験の積み重ねから、「自分達は、できる」という自信を持ち、「カレーライスは絶対に出来上がる」と信じ、見通しを持ちながら、挑戦的意欲を持って臨んでいたのではないだろうか。

少しジャガイモや野菜が硬いカレーライスに仕上がったが、本人達の満足度は高く、他の職員にも「かりん組が作りました！」と笑顔でおすそ分けに回っていた。



3. 今回の活動の振り返りから（考察）

今回の一連の活動内容を、テーマの切り口から振り返ってみる。

1) 子ども達の強い想いから始まった

今回の活動は、「トマトがきらいなお友達もいる……」「かりん組のみんなが食べられるトマト料理を作って食べたい」という、子ども達の想いからスタートした。その思いの実現のために皆で協力し、役割分担しながら進める5歳児の姿があった。ピザ作りのときには「今度はアツアツのピザが食べたい」、芋掘りの後は「サツマイモクリームがのったパンケーキを作りたい」など、子ども達の「挑戦的意欲」は、子ども達の中から湧き出る「想い」から芽生えてくると考える。

2) 「子どもの想いを実現させたい」という保育者の熱意が大切なエネルギー

子ども達の挑戦的意欲を育てるための保育環境として、保育士の関わりが重要である。

「子ども達自身の手で作らせてあげたい」という想いを持ち、「保育室でスパゲッティを調理するにはどうしたらいいか？」と試行錯誤する姿があった。保育士自身にとっても挑戦的な活動であったと思われるが、今回の事例では、担任保育士が、自分の得意な料理を保育に活かすことで、保育士自身も楽しみながら取り組めた。このように、各保育士が自分の得意とする分野で子ども達と関わりながら、保育士自身も意欲的に取り組む姿を見ることが、子ども達の意欲の育ちにもよい影響を及ぼすものと考えている。

3) 子ども達も制作に加わった保護者向け壁面掲示

日頃から、当園では活動の様子を壁面に掲示しているが、楽しい活動を知らせたいという想いから、今回は子ども達自らもその制作に加わった。その内容を子ども自ら保護者に説明することで自信を持ち、更に活動を魅力的に感じる事ができたと思われる。更に今回の掲示内容は活動の経過を追って知らせるものであったが、このような掲示の活用も保育環境の工夫として、子ども達の意欲を継続させることにつながったのではないかと思われる。

保護者も経過を読みながら「やりたいことを何でもやらせてもらえて、いいね」と、活動の様子やねらいを理解し、応援してくれたり、中には「スパゲッティ作るなら、バジル持っていったら？」と、子どもに持たせてくれたりする保護者もいた。

4. まとめ

今回は、栽培活動からクッキング活動へと発展した事例を基に、「子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材の在り方」について検討した。このような活動が偶発的に起こるのでは、園として「子ども達の挑戦的意欲」を育てているとは言えない。保育士が変わっても、活動の内容は違って、同様に子どもの育ちが保障される、その基礎となるものは何かを考えてみた。

1) 保育士を支える園内研修

当園では、定期的に「他クラス的环境で“いいね!”と感じた写真を持ち寄る」という内容の研修を実施している。様々な経歴の保育士が様々な視点で「いいね!」を持ち寄る事で「園として大切にしたい事」「子どもの育ちのつながり」などを語り合い、共有できる。また、新人保育士も自由に意見を言いながら参加しやすく、ベテラン保育士も新人保育士も共に子ども理解が深まり、保育士自身の意欲を育てる機会となっている。

2) 園全体の文化

当園では日頃から“子どもの人権の尊重”を意識し、保育士が「ダメ、いけませんをなるべく使わない」保育を目指している。そうする事で、0歳児からの情緒の安定と保育士との信頼感、園で過ごす事に対する安心感を保障でき、子どもが自ら様々な事に興味を持ち、取り組んだり挑戦したり、自由に表現しようとする環境を用意できる。

また、実践を掲示することにより「〇〇組の掲示、面白いですね!」「こうやると更に面白いよ!」などクラスを越えた保育士同士の何気ない会話が生まれる。こうした中から新しいアイデアや、保育士自身の「やってみたい!」という挑戦的意欲が生まれ、その意欲を支え、応援する園全体の雰囲気へとつながっていく。

3) 家庭との連携

当園では、日頃から「保護者と一緒に子育てを」という意識を強く持ち取り組んでいる。例えば個別面談では、保護者にまず「どんな子どもに育てたいか」を語って頂く。また園とご家庭とで「子どもの良い所」を共に喜び、「伸びようとしている所を更に伸ばす為には?」など具体的に話し合い、関わり方を共有している。掲示や園便り、懇談会、個別面談等、様々な機会に園の保育について発信し、保護者に信頼して頂く事で、子どもの様々な挑戦を応援して頂く事につながる。子ども達の挑戦的意欲を支える環境として、保護者との連携は不可欠である。

今回、「栽培活動とクッキング」という一連の事例からテーマについて掘り下げる作業を行った。5月末から始まった栽培活動を皮切りに、3月末のクッキー作りまで、子ども達の意欲は途切れることはなかった。月見団子、サツマイモなど、季節の食材も活かしながら、また、「保育園で出るおやつを自分たちで作りたい」「年下のクラスにもご馳走したい」など、子ども達の想いもますます高まり、初めての挑戦である「最初から作るカレーライス」に至っては、「自分達はできる」というゆるぎない自信を持っていた。

子ども達の「挑戦的意欲」を育てるために、保育の内容はもちろん、研修の在り方、保

護者との関係作り等、その基礎となるものを大切にしながら日々の保育実践を更に豊かなものにしていかれればと思う。

担任が子どもの想いを丁寧に聴き、実現を支えてくれるような安心できる環境を基礎に、今までの経験を活かして自分たちで考え、仲間と調整し、協力して、時には失敗して、家庭も巻き込んで…たくさんの挑戦を経験して卒園していった彼らが、当園での経験を土台に、これからも様々な事に挑戦し続ける事を願っている。

調査研究シリーズ62

子どもの挑戦的意欲を育てる 保育環境・保育材のあり方

平成28年3月31日発行

編集／公益財団法人 日本教材文化研究財団

発行人／新免 利也（専務理事）

発行所／公益財団法人 日本教材文化研究財団

〒162-0841 東京都新宿区払方町14番地1

電話 03 (5225) 0255 FAX 03 (5225) 0256

<http://www.jfecr.or.jp>

表紙・口絵 アートディレクション：竹内則晶／デザイン・レイアウト：宮下豊
印刷（株）天理時報社